

# 身体と記号の共生

～見えない語り手～

前川 美行

## 1. はじめに

ここ数年筆者にとってあらためて「身体」とは何かと考えさせられる機会が増えている。情報の動きが早く実感を味わう暇のないまま流れてしまう。また、実感なくさらさらと流れる語りに接すると、聞き手として身体でなぞらえることが難しいとも感じる。聞き流す情報であればそれでよいのだが、面接ではそこが非常に苦しい。そしてこのような語りの問題は、個人のみでなく現代社会における身体の集合的問題ではないかと思うのである。

私たちは半世紀前には想像できないほど情報化が進み、記号化された抽象的な情報の飛び交う世界に生きている。「直接経験を伴いにくい(市川<sup>1</sup>, 1984/1993)」情報に囲まれ、それを利用している。直接経験を伴わない複雑で抽象的情報が、当たり前のように私たちの生活に入り込んでいるのである。そのような情報化社会はもはや生活に不可欠であり、私たちは少し前の生活にさえ戻ることができない。しかし、当たり前の世界を今一度見つめなおしてみると、かつて社会が急激な情報化へと進み始めたときになされた鋭い論考に出会う。そこに指摘されている問題はまさに私たちの今、社会の現実である。しかも次々と猛スピードで展開していくために、両義的な技術進歩の否定的側面は省みられる暇もなく、積み残されて蓄積したまま進んでいることにも気づく。

そのような社会のあり方と身体性の関連は、技術進歩の産業革命の時代から、あるいは人が言語を持ち、抽象的思考能力を獲得したそのときから、綿々と続く問題である。ここでは、そのような社会に生きる私たちの身体性の問題に思いをめぐらせてみたい。

## 2. 身体の疎隔と「孤」

### (1) 身体の疎隔と感覚化能力

まず現代の情報化社会について、哲学者市川浩が20年以上前に提起した問題を取り上げてみよう<sup>2</sup>。情報とは人が生きるうえで自由を保障するものであるが、「受容能力を超えると、われわれは錯乱状態に陥るか、そうならないために自閉」する。また、情報は直接経験を伴いにくく、「身に迫る力」がない。

*真偽不定の情報経験によって構成される現実、受容能力を超える過剰な情報刺激、間接経験による疎隔された世界体験、これらがいずれも精神病理学的な症候とどこか似ているのは不気味なことです。(中略) 臨界点は…人間の自然的身体がもつ諸条件との衝突から生まれま*  
*す。(中略) 臨界点を回避できるかどうか*  
*は・・・地球環境と地球外環境の限界を臨界点に達しないような仕方でのりこえ、また自然的身体*  
*の諸条件を拡張することが可能かどうか、にかかっています。(p73) ——市川浩——*

この言葉は私たちの今にぴったりではないだろうか。しかしながらこのような言葉を引用すると、何を今さらと反論を受けそうである。私たちは情報化社会のなかで十分に情報を享受して生きているではないか。夜中に見る美しい映像チャンネルによって世界の美しさや見たこともないような昆虫の世界、自然の驚異も身をもって体験している。テレビも3Dで体験できるようになれば、さらにまるでそれを実際に見ているように、あるいは見ているよりも“リアル”に見ることや体験することができであろう。また、今や身体性の問題はロボット工学にとっても重要なテーマであり、人の技術は果てしなくその欠点を補い得る方向に進

んでいるではないか。そんな時代に、情報化社会が身体を疎隔するなどというのは笑止千万。科学技術を理解していないからではないか。情報によって思考や体験の自由度は増していくのであり、それが身体を疎隔を生むというのはあまりにも偏狭な観念的考えではないか。反論は、そのとおりである。今ある現実を否定して、過去を回顧することで生まれてくるものはないだろう。しかしながら、やはり情報が身体を置いてきぼりにして進んでいるということも事実ではないだろうか。身体を使わなくてもいろいろなことが便利にできること、これは何かの影響をもたらしているのではないだろうか。情報化社会は身体を自由にすると同時に、身体を疎隔しているのではないだろうか。

市川が指摘した身体と記号化情報との問題は、筆者にとって臨床で出会う、語る主体の曖昧さ、あるいは社会にあふれる「身のない言葉」の問題を連想させた。その問題を紐解く手がかりが身体論に見出されるかもしれない。

直接経験を伴にくい抽象的な記号化情報の中で身体を解放し、情報による自由を享受して生きるためには、人は「想像的なものを感覚化することまで、シンボル化の能力を拡張・深化することが必要」であり、情報化社会が進むにつれて

「記号を実感し、記号や情報によってもたらされる抽象的・想像的世界を感覚化する能力が必要」になるだろうと市川は述べている。これは、私たちの能力の問題である。受け取った情報をいかに自分自身の直接経験を伴わせて受け取っていくことができるかという能力、換言すれば自分自身の身を入れて情報を処理していくことができる能力ということであろう。感覚する能力をいかに拡張できるか、情報化社会はそれを求めてくるのだ。かつ能力であるならば個人差が生じる。

市川は記号化され複雑で高度に抽象化された情報化社会に適応するために、身体が記号に感応し感覚化しうる能力を養える方向に進んでいかざるを得ないこと、そして情報に感応する身体とはどのようなものなのかということを論考している。

## （２）関係における「孤」

次に、別役実<sup>3</sup>という劇作家が20年前に著書で述べていることを取り上げてみたい。別役は、ある中学で実際に起こった中学生K君の自殺とその背景にあった「葬式ごっこ」に代表されるいじめについて論考している。「葬式ごっこ」が自殺したK君に向けたものは、「無記名の悪意」であり、集団の中では誰も明確な自分としての意志を表明しないまま、いじめが行われていく。そのようなときに「誰がやったんだ！」と怒ることは難しい。なぜならば、そこには誰も怒る相手が存在しないからである。皆、「冗談だよ」と笑い、同じ場にいる空気を読めと強要してくるのである。その場の集団の一員としていたいならば、被害者ですらその場の空気を共有しなければならない。すると、面白がっていじめるという集団の空気にあわせて、自分をもいじめの対象としていかざるをえなくなる。

このような事実が、クライアントの話のなかに出てくることがある。誰かが誰かをいじめのではなく、「そこにいじめがあった」と。述語的表現でのみ表される主体を消した表現、それはよく耳にする表現である。その表現の背景には、集団の中で個人として存在することが苦しくなっている私たちの心理があるのかもしれない。自由や責任から逃げるのが独裁者を生み出し、戦争や大量殺戮を引き起こすことはすでに60年前に示され、私たちはその反省の上に社会を作ってきたはずなのに、である。

別役を引用しよう。新聞記事によれば、K君は登校して自分の机に飾られた花やお菓子を見て、「なんだ、これー」「オレが来たら、こんなの飾ってやんのー」と言ったという。

**個人の悪意が独立した「個」としての母体を持たなくなった。無記名性のもっと普遍的な善意とか普遍的な悪意みたいなものに変わってしてしまう。それで、そこに立ち会って個人がそういう状況に対応しようとした場合は、自己を関係のなかに植えこむことしかできない。（中略）自分が独立した「個」であって、自分がどう思っているかということを主張しようとする**

ると、それは行為になって、これは攻撃になったり、逆に逃亡になったり、降伏になったりする。

——別役実 (p72) ——

別役は「個」としてのぶつかり合いが近代的特徴であり、ドラマもそこで生じてきたという。しかし、現代（別役が書いていた 20 年前だが）は、そのようなドラマが難しくなっていると述べる。関係において無記名の存在であることを強要する閉じた社会では、人は行為者にはなりえない。

**そこで何ができるかという、関係の中での「孤」であることを確かめ、自分がどこにいるか、自分がどうその中で機能しているかということしか主張できない。それが自己主張の最大限です。つまり行為じゃなくて態度になる。態度がその中での最大限の主張になる。**

——別役実 (p73) ——

こうして、行為ではなく態度が過激になるという形のドラマが生まれる。

無記名の存在であることを人に強要する集団内で、共有する空気を感じ取ることを拒否し（あるいは感じ取れないという形で）、「孤」となり、主体＝行為者としてではなく、態度として自分を主張せざるをえなくなるあり方を別役はこの事件から読みとっている。別役は 20 年前に、「個」として互いに名前を持つ存在として向き合い、個人の意志を持って生きることが難しくなっていると指摘したのである。この事件にすでにみられた集団心理のダイナミクスは、いじめとして問題視されてきたにもかかわらず、解消されたというよりも、今は学校では日常茶飯事になってしまっているように思われる。そして、そのような圧迫する小さな集団を生き抜いてきた子どもたちが、大人になって生きにくさを抱えている。

「孤」となる存在とは、どのような身体のあり方であろうか。そもそも私たちの身体は、人に感應する身体である。複数で話をしているとき、言葉を紹介しながらも意味内容よりもむしろその場が醸し出す雰囲気の共有が意外に大事であることが多いものである。その場で言葉の内容や、何が正しいかにこだわって話をすると、場にそぐわない

ことになって浮いてしまう。空気が読めない状態である。そこに流れる言語的コミュニケーションに伴う、間身体レベルでの親密さの共有、つまり非言語的コミュニケーションが重要な要素なのである。その間身体的かかわりがうまく受け取れない場合に、おそらく言語的なつながりのみを求め、こだわり、逆にコミュニケーションができない

「孤」の状態が生まれるだろう。K 君がそうであったということではなく、別役の指摘した「孤」という存在とは、そのように間身体的かかわりが閉じてしまっている場合に起こりうる状態と考えられるだろう。一方、場を間身体的レベルで共有していると思っている集団も、実は人称を持った身体とはなっていないのではないだろうか。孤立させ、「孤」を生み出す集団は、集団内にも「孤」を作り出す。間身体的かかわりが逆に身体を縛り、言語でのコミュニケーションすなわち意思疎通や意見交換を成立させないからである。言語的自己レベルでのかかわり合いを意味のないものにするのである。身体が互いに間身体的に感應し合っただけのかかわり合いをもつという特質そのものが、逆に集団の空気を読むことに終始し、自分自身を無記名の存在にし、集団内で人は人称以前の身体となってしまうのである。

別役の不条理劇と呼ばれるものが生み出されていく背景にはこのような深い洞察がある。彼は間身体的かかわりが逆に身体を縛る結果となり、人が間身体性を消失させて「孤」となってしまうことを描き出した。これを読んで筆者は、私たちが情報に感應し感覚化していく能力を獲得する方向に向かいつつ、かつ集団内で前人称的存在であれと要請されてきたことに気づく。すなわち間身体的反応を消失しつつ、抽象的記号に感應する身体を生み出していかねばならなくなっているのではないかと思うのである。

### 3. さまざまな身体

ところで市川の身体論は、日本語の〈身〉という言葉、概念を「自然的存在であると同時に精神的存在であり、自己存在であるとともに社会的存

在であるわれわれの具体的なありようを的確に表現している<sup>4</sup>」ものとして、〈身〉をめぐるさまざまな記述から考察を始めている。

#### （１）「〈身〉の風景」<sup>5</sup>

市川は身体のさまざまな側面を「〈身〉の風景」として紹介している。たとえば、「主体身体」。主体身体とは内部感覚をもとにする身体で、主体的に生きている身体のことである。その主体身体は、物とのかかわりや他者とのかかわりによって、常に、具体的な皮膚でおおわれたこの見える身体を超えて拡大すると述べる。それは、身体図式と呼ばれる私たちの脳が認知している自分の身体、ということでもあろう。市川は「われわれの生き身は靴を身のうちに組み込み、靴の裏まで伸びている」と表現しているが、たとえば車の運転時なども私たちの生き身は車を身のうちに組み込み、車全体にまで伸びているといえるだろう。だからこそ、巨大なクレーンや大型車の運転も一人の人間が操作可能であるばかりか、一人で操作するほうが動きはスムーズになるのだろう。また、巨大ロボットのなかに入って巨大ロボットの身体を自分として操作するアニメを、私たちはそこに自分の身をはめ込んでありうることとして受け入れて見ることができるのもそれゆえであろう。また主体身体の動きには意識的レベルの制御のみではなく、無意識的レベルでの制御（脊椎反射など）も含まれる。

次に、対象として見たり触ったりされる「対象身体」。たとえば、右手で左手を触る。左手は対象であり、右手は主体である。しかし同時に右手は左手によって触られる対象でもあると説明している。対象身体は身体が身体を認識する、「身が身へ折り返す二重化」によってとらえられるものである。すなわち市川は身体を自分の身体と認識する二重化はメタ行為であり「もっとも原初的な自己意識の萌芽」と考える。自己意識としての抽象的反省は「見える自己に対する身の折り返しからはじまる」、すなわち「身体レベルでの反省」から始まるとする。それは言葉の発生によって意識的反省へと深化する前の、「直接的に生き、演じ

られる身体的反省」である。

一方発達理論でも身体認識というメタ行為は自己意識の萌芽と認められている。たとえば、スターン（1985／1989）<sup>6</sup> は生後 2～6 ヶ月の間には、母の身体を自分の身体とは別の存在として感じるようになり、「中核自己感」が出現すると述べる。それは意識とは無関係に作用する、「身体的単位として体験される身体的自己」である。自分を反省的に意識する自己意識よりも早期に「統合された自己感、他者感を持つ能力がある」とスターンが述べたことと、市川が「もっとも原初的な自己意識の萌芽」として、「身体レベルでの反省」を人見知りの時期（生後 7～8 ヶ月）に始まる抽象的反省に先んじたものとしていることと同様であるといえるだろう。

そのほかの風景として「対他身体」を挙げる。これは「他者との関係においてある私の身体」であり、他者に所有されていて私の自由にはならず私自身を支配さえするものである。市川は、人見知りをする生後 7～8 ヶ月の子どもの恥ずかしいという感情にすでに「他者に対する私の身体の把握」という他者性の契機が含まれていることを考察している。また、具体的身体のほかに、「表情的身体」を挙げている。それは、「身体レベルでの他者の主観性の把握と、私の応答」という非言語的コミュニケーションのもとになるお互いに間身体的に感応しあう身体であるが、味わい深い言語的コミュニケーションも「間身体的な場の共有」がなければ成り立たない。そのように言語的／非言語的コミュニケーションのもとになる身体、すなわち間身体的感応をするのが「表情的身体」である。対他身体と表情的身体は人とのかかわり合いの場に現われる身体である。

このような〈身〉の風景は、「現象としての身体」として現われる。「われわれの具体的なありよう」とは、皮膚でおおわれた見える身体をもち、その身体によって存在を与えられながらも皮膚の限界を超えるもので、「〈身〉という概念によってもおおいつくせない拡がりをもつ」と述べる。そしてさらに「意識に現われる身体を背後で支えて

いる現われない身体」を含めた「構造としての身体」、つまり「錯綜体としての身体」をとらえることが重要であると指摘している。統合されている構造は常に解体され再統合されるものであり、無数の可能性を秘めていること、一つの統合された構造には「無数の可能的・潜在的な統合<sup>7</sup>」が連合していることを忘れないことだと教えてくれる。これが私たちの今を生きるコスモロジーを作り出すことにつながると身体論は進められている。

筆者は、皮膚におおわれた具体的物体としての身体を超えた身体のあり方を述べたこの市川の身体論に共感する。そこに現われているものは身体的実存であり、メルロ＝ポンティが「身体性（corporéité : corporeity）」と表現したものでもあろう。メルロ＝ポンティは次のように述べる<sup>8</sup>。

**身体とは一つの対象ではない。おなじ理由によって、私が身体についても意識の方もまた一つの思惟ではない。つまり、私は身体を分解し再構成して、それについての一つの明晰な観念を形成するというわけにはゆかぬのである。身体の統一性は、いつも潜在的であり、あいまいである。身体はいつもそれがあるところのものとは別のものであり、いつも自由であると同時に性であり、文化によって変形されるちょうどそのときに自然のなかに根を下ろしており、けっして自己のなかに閉塞しないがさりとてけっしてのりこえられてしまいもしない。（中略）私が人体を認識する唯一の手段は、みずからそれを生きること、つまり、その人体の関したドラマを私のほうでとらえ直し、その人体と合体することだけである。**

—— メルロ＝ポンティ（p325） ——

市川もメルロ＝ポンティも、身体を見えないものを含む両義的なものとしてとらえ、それらを含む身体をもつこと、そのような身体性を生きることが重要だというのである。

## （2）自己感

スターン（1985／1989）は、乳幼児の発達について被観察乳児と臨床乳児の両面から理解する

必要性を重視し<sup>9</sup>、対人関係における乳児自身の主観的体験の発達に注目し、「自己感」の発達としてとらえたが、その考えを身体との関連で取り上げてみたい。

誕生直後から2ヶ月頃までは、精神分析理論では自閉期と考えられていたが、実際には乳児の知覚は外界のある種の声、音、視覚的刺激に敏感に反応していることはよく知られていることである。身体的に外界とかかわりを持つ乳児自身の能力が発達形成に寄与することに注目し、スターンは「新生自己感」と呼んだ。そして「ほとぼしり」「爆発性」などの言葉で表現される、カテゴリー分類以前の情動そのものとしての動きを「生氣情動（vitality affect<sup>10</sup>）」と呼んだ。わっと火のついたように泣き出したり、じっと見つめたりする生き生きとした身体の動きで表現される情動のことである。まだ具体的身体は、乳児には全体としてはとらえられていないが、かかわりと動きを持つ身体の体験をしているといえるだろう。

次に生後2～6ヶ月の間には、自分が身体を動かしていることや一貫した存在であるという感覚を持つようになり、情動が自分のものとしてまとめられ、連続性の感覚をもつ。これらの基本的自己体験が統合されて「中核自己感」は形成される。これはすでに述べたように対象身体と類似した概念である。独立した身体を持つ存在であるという身体レベルでの認識が自己意識へとどのように発達していくのか、自己鏡像認知の実験観察などさまざまな研究されている。ともあれ、スターンはこの時期に異なるものとして自己－他者を体験していると同時に、他者とともにあることを主観的に体験することによって、身体的親密性の体験が可能となると述べる。この中核自己感レベルの身体的かかわり合いは身体の直接体験であり、このレベルのかかわり合いがしっかりとされていること、これが実感の裏づけとなるのであろう。

そして、生後7～15ヶ月には「主観的自己感」が出現する。「自分にも他者にも心があることを乳児が発見する」。ここで、他者の内側にある状態と自分の内部にある状態が似ていることに気づ

き、自分の内的主観的体験と他者の内的主観的体験が類似した交流・共有可能なものであることを認識する。間主観的かかわり合いの誕生である。中核的かかわり合いと間主観的かかわり合いは「共存しながら互いに作用しあう」。身体的親密性に加えて心的親密性も体験されるようになるのである。この間主観的かかわり合いにおいて「情動調律(affect attunement)」というパターンにスターンは注目する。母親が乳児の行動を単に模倣していた段階から、意味づけのある模倣へと発展し、母子間で生き生きと展開することで、乳児の内的主観的体験が意味づけられていく。身振り、表情などが間主観的に共有されることで乳児が世界と意味ある交流を始めるのである。

やがて、言語を介したかかわりへと発達進む。15 ヶ月以降における「言語自己感」の獲得である。自己を客観視し、共感行為が可能となり、象徴的遊びの能力や言語を獲得して、他者と意味を共有できる体験が大きく広がる。しかし一方で「言語は自己体験の分裂」を引き起こす。体験と言語のずれを引き起こし、実存的自己と言語的自己が乖離し、「自己は言語によってどうしようもなく分割されてしまっているという」実感が生まれる。それまで体験していた身体的親密さや心的親密さが疎外され、「言語固有の非個人的抽象レベルへと移り、それ以外のかかわり合いの領域に特有な、個人的、直接的レベルからは遠のいて」いくのである。言語によるかかわり合いはこのように両義的である。

中核自己感レベルのかかわり合いは、意識を介さずに身体的に親密感を体験しうるもので身体にもとづくものであるし、間主観的かかわり合いにおける情動調律は、身体の動きや活動、つまり声や表情や動きの模倣・同期であり、やはり身体をもとにしたものである。このようなレベルの自己感が発達してこそ言語が獲得され、広がりを持った主体身体を生きられるのであろう。

## 4. 身体と時間・空間

### (1) 主体身体の広がり

さて、私たちが経験や自分の考えを語る際、身体が動いている。子どもの頃の遊びの風景を話しているとき、私は身体ごと時間を過去に移動して、その経験を今ここで語っている。主体身体は、そのような時間的・空間的な広がりをもつ。一方、過去の経験をまるで他人事のように話す場合には、自分の主体身体がその過去を含みこんでいない、あるいは過去に自分の主体身体が移動できていないのである。また、人から過去の行為を確認されたとき、私たちはその場所や見たものを思い浮かべながら自分の身体が何をしていたかと思い出す。主体身体を時間的に広げながら過去へと移動して記憶をよみがえらせている。

このようにみていくと、人格の解離や健忘とはある時点の身体記憶と主体身体が分裂して身体記憶が意識から失われることと考えられる。それは主体身体が自由に浮遊するというのではなく、自由な広がりを失った膠着した状態であり、本来は広がりをもつはずの主体身体が意識の位置のみに固定して膠着しているのであろう。身体になじみのある記憶をふと思い出したことが、健忘者の記憶を蘇らせるきっかけになるのも主体身体が広がり回復したからといえる。私たちは、その時その時に受けた身体記憶を主体身体が時間的空間的な広がりを持ってとらえ直しながら生きているのである。

### (2) 鬱と身体

ところで鬱のクライアントの話を聞いていると、身体が外界に圧倒されていると感じることが多い。鬱には身体症状も多く精神運動抑制という言葉で説明されるような症状も多々あり、身体的要因が大きく関与しているとしばしば言われている。そのような症状は神経伝達物質と関連しており、薬物はその点を直接改善してくれる効果を持つが、そのような症状による苦痛の語りを聞くとときに、筆者は「身体が外界に圧倒されている」と感じるのである。新聞が読めなくなる、言葉がうまく出てこない、料理の手順がわからなくて立ち

つくすなどの訴えは、鬱になる前にはできていたことができなくなることが特徴である。そのときに、鬱の人はできない自分を認識できるためにさらにショックを受け、自信喪失し不安焦燥感が増加することもある。ひどい時には座っていることもつらいし起き上がれない。身体の奥深くに流れているはずの身体的エネルギーが流れず、外界と生き生きとしたかかわり合いが不可能となる。にもかかわらず主観的に体験し認識する能力が働くために自信喪失し自分を責める。多くの記号化情報に身体を馴らして活動してきた人ほど、この疲弊が激しいと覚えることがある。

自殺衝動も「身体が圧倒されている」状態と覚える。身体が外界からの刺激に圧倒されていることを、自分自身がだめだという証しとして意識が混乱して受け取り、自分自身の身体を消す方向に一気に突っ走ってしまう。なぜ、身体を消す方向に行ってしまうのだろうか。働き盛りの過労による自殺には、集団の中で名前を持った個人としての身体が消され、間身体的かかわり合いがなくなり、行為者として生きることが許されない状況に関係しているように思う。業績を上げ、人に親切にしたり集団をまとめたりすることが業務内容に入っていないならばしても評価されない。仲間のことをかまっているよりも、自分の成果をあげなくては自分が追い込まれる。そこには間身体的なかかわり合いは逆に必要はない。記号的な言語のコミュニケーションが優先される。場は和やかな空気を醸し出さず排他的で拒否的な空気となり、その場に感応することは自分自身を締め付ける。自由な間身体的かかわり合いを拒否しあっているような場の共有がそこにはあるのかもしれない。身体的親密さも心理的親密さも感じられず主体身体は硬直して、疲弊した具体的身体そのものが自分自身であると感じてしまう。しかも、記号化情報に馴らしてきた身体は感応の枝を人に向かって伸ばせない。そのために大切な人からのさまざまなレベルでのかかわりが親密さとして受け取れないほどの状態になるであろう。「孤」である自分の身体が、内的に生き生きとした動きがなく、間

身体的かかわり合いの感じられない重い物体として感じられなくなるのではないかと思う。

そこで望まれることは、その場から離れること。感覚は鋭敏で小さな音でも侵入しやすく身体を圧倒してくる。記号化情報から離れ、身体をその情報の氾濫から休ませることが第一だ。また、人からの親密さを感じ取れないほどの状態であると同時に、自分の身体が対他身体でしかなくなり、自分のものでなくなっているために、人と接することは自分の身体が他者のものになってしまう状態を体験しつらいだろう。そのような状態から主体身体の揺り取りを取り戻し、表情的身体として間身体的交流を再び覚えることができるようになるためにはどうすればよいのだろうか。

心理療方法は言語的コミュニケーションをもとにしているが、疲弊した身体には言語レベルのかかわり合いは緊張感を与えることが多い。言語はそもそも複雑な情報を複合的に伝えるものだからだ。複合的な情報を処理する能力が低下し、情報の中から特に表情を感じ取る間身体的感応力が低下しているために、言葉が平板なものと感じられたり、実感が持てなくなったり、さらには意味がわからなくなったりもする。難しい説明などは、記号への応答を求めるような抽象的レベルの言語使用となり、身体にとっては、なけなしの力を消耗させる。疲弊した語り手の言葉と身体が伝えるものに、間身体的レベルで感応する聞き手が、そっと間身体的レベルで反応を返し続けることが大切だろう。それは情動調律を行うように語り手のリズムに合わせる聞き手の身体的動きでもある。エネルギーの下がった身体に流れる静かな情動に静かに反応を返すこと。やがて、その静かな情動が少しずつ生き生きと流れ始めるようにリズムを合わせつつ、短くわかりやすい意味の言葉を返す。その交流をもとに、動きが表情となり、お互いが自分の身体の表情を覚えることができるようになる。「身体レベルで他者の主観性」を把握し、かつそれに対する「私の応答<sup>11</sup>」を互いに覚えることができ、豊かな非言語的コミュニケーションが成立するのだ。したがって、語り手の情動がちよ

つとした身体的動きや態度に表現されたときはそれを大事にしたいものだ。聞き手はその情動にしっかりと間身体的に反応を返すことが重要だ。その上に言語を重ねるのが聞き手の役割だろう。

### （３）遷延型鬱の A さん

ここで、ある休職中の 40 代男性 A さんを引用して鬱と身体について考えてみたい。スポーツが得意で言葉数が少なかった A さんは、もともと会話が苦手で、自分から、しかも自分のことを話すのはほとんどしなかった人であった。鬱の遷延によって休職が長引き、状況が悪化するとともに家の中で居場所がなくなっていくが、なにもできずに一日中こたつで寝ている A さんを見て、妻は苛立ち不安を募らせていた。そこで心理療法が始まったが、興味のあることや困っていることなど何でも少しずつ話してもらうことから始めていった。初めのうちは「話すことは苦手」と言っていたが、次第に「話すと楽になる」と感じるようになった。妻に何か言われるとおろおろして寝込んだり、ふてくされていたりしていた A さんが、やがて妻に言い返したり、感情を表現するようになっていった。

一方筆者は妻や家族に同席してもらいながら、家族間の調整を図る試みもした。何もしてくれない、と苦しそうな妻の言葉に、何もできないセラピストとして筆者は A さんと二人でうなだれてしまうようなこともあった。1 年後、家事や散歩などで身体を動かすようになり、日常生活での活動や活力が一見問題なくできるほど回復した頃のことである。車の運転時に「車間距離が狭くて怖い」と助手席の妻に言われた。本人はそれには気づいていなかったが、仕事が運転業務であったので非常に意外なことであった。判断など反応の遅れがもちろんあるのだが、さまざまな面が改善したなかでも、主体身体がまだ車を組み込む拮りを持って自由に感じられていない状態なのだと筆者には思われた。それまでは、休職前にはやったことのない家事などを少しずつやっていたのだが、あらためてクライアントに得意な作業をするように勧めることにした。細かい装飾品の工作や日曜大

工が好きだったが「今はそれが難しい」というクライアントに、塗り絵という単純な作業を家でやってくることを勧めたのである。初めは丁寧に枠を描きながら濃く緻密に塗りこんでいた絵が、次第に濃淡差が生まれ、墨絵のような単色の塗り絵も出来上がった。塗り絵は 1~2 枚ずつ 1 年ほど毎回持ち帰って続けていた。生き生きとした活力が生活全般に戻り、塗り絵をきっかけにして子どもと話をしたり、妻とも一緒に出かけることが増え、家族の関係も穏やかになっていった。自分の気持ちを言葉で話すことと同時に慣れ親しんだやり方で素朴に身体を動かす作業が、A さんの身体感覚を戻し主体身体の拮り方を回復することに役立ったのであろう。元来話すよりも身体を動かすほうが得意だった A さんには、得意な身体の動きをしていくことが、生きるリズム感を自分の内に感じることとなり、回復に役立ったといえるだろう。

## 5. 記号化情報への感応

### （１）具象と抽象

鬱との関連に続けて、情報化社会における身体について考えを進めてみよう。

商品広告とは、直接「買ってください」とは言わない。明らかに購入を勧めているにもかかわらず、企業の介在を感じさせずに商品名を直接身体に訴えかけ、私たちの身体に記号を記憶させる。しかし実は企業側の視点で語り、見せているだけだ。そして言葉というよりもニュアンスを消し記号化されたフレーズが印象的に身体に直接訴えかけてくる。子どもはそれに敏感に反応する。私たちの身体は子どもの頃からこのような情報を受感して、情報の感覚化能力を発達させてきたのかもしれない。市川が指摘するように身体が情報化社会のなかで生きるためには、記号として受け取ることに長けていくだけでなく、情報の中に主体身体を入れ込み感覚化しつつ意味ある抽象的言語を獲得することが必要だろう。しかし、記号への感性と間身体的感応とは両立しにくいために、表面的な適応を図る方向が生まれる。



表面的な適応とはどのようなものになるのだろうか。まず、出来事や人から言われたことなどを描写している語り手に「それであなたは思うのですか？」と尋ねた場合を考えてみよう。返事はさらに出来事や人や自分の言動の詳細な描写になって、なかなか自分の考えを話すことに至らない場合がある。そのような出来事描写を通して伝えている大切な思いもあるし、あるいはとにかく一緒に情報（出来事）を共有してほしいということもある。具象的な語りであろう。あるいは、国語で『著者は何を言いたいのか』と尋ねる問題がある。評論や意見などの内容をまとめる問題ではなく、小説など、ある情景や主人公の心理描写を通して、著者が何を言いたいのかと尋ねられる問いである。内容の地平から一つ上がった思考、著者の意図という視点を入れて考える抽象的思考である。発達的には9歳前後に獲得されるが、「心の理論」で示される問題でもこのような視点の移行が問われている。「情報＝真実」であると内容に感応するだけでなく、誰かの視点によって与えられた情報であることを、内容そのものと同時に認識しておくことを私たちは求められる。この抽象的思考能力とあわせて考えると、具象的語りは、情報を自分の視点で切り取って語っているにもかかわらず、そこに自分の視点が入っていることを見せないようにする語りといえるだろう。抽象的視点を持ち得ない場合と、視点の介在を見せない場合とは違いがあるだろうが、視点の介在を見せないで話すことをよしとする語りは発達の（文化的）に獲得した面があるのではないかと筆者は感じる。場を共有するためには誰かの視点は必要なく、むしろ出来事描写で場に委ねる方が柔軟だからだ。ましてや日本では述語的表現は一般的であるし、個人の視点を突出させては場が強張り、しらける。文化的には場を考慮しながらも、言葉に現われない部分に深い思いがこめられた表現であったはずが、視点を見せない語りは、語り手の深い思いの表現とはならず、単に事実の語りになりやすく、語り手自身の表情的身体から発せられるはずの表情を消失させていることが多いよ

うに思う。出来事描写の具象的語りでは、時に次元が変わるような視点の自由さが失われ、主体身体が出来事の中に埋もれてしまっている。

他方、記号への高度な感覚化能力を身につけ、抽象的記号を操作することに長けていく方向がある。複雑な情報に対する感覚化能力をもち、高度な思考が可能となる。しかしながら、そのような場合にも表面的適応へと進むことがある。抽象的言語能力がそれまでの身体レベルでのかかわり合いから遠ざかってしまうからである。情報に対しては、送り手の存在を感じて客観視しているために、内容に主体身体を入れ込んで感応することは少ない。先述した情報を具象としてのみとらえる出来事描写の語りと、情報を記号としてとらえるこの語りとは対照的である。こちらは抽象化能力が大きく自己を分割してしまう可能性をもち、言語が記号と化し、実感のない平板で難しい語りが生まれ、極端な場合には広告のような記号的言葉の羅列と同質の語りとなる恐れがある。そして具象的語りと同様にこの場合も語り手が存在せず、間身体的場が醸成されにくい。のみならず語り手の身体は記号への感応を高めているために間身体的に感応しないかのようなのである。日本文化が、言語で間身体的交流を豊かにする術を育ててきたことがまったく通じないかのような言語表現だが、これは記号への感応の一形態、つまり、イメージあふれる象徴的レベルの豊かな言語表現へと向かう過渡的適応の一形態と考えられないだろうか。言語表現と自己の新しい関係を拓く可能性を秘めていると思うのである。

## （２）身体の可能性

興味深いことに、出来事描写は時に生き生きとした語りとなり、聞き手は引き込まれ、身体が感応し、つられることがある。具体的で生き生きとした語りは聞き手の身体に直接働きかけるので、聞き手は思わず反応するのだ。これは、生気情動への反応であり、情動調律でもあるだろう。しかしこの生き生きとしたかかわり合いは言葉で区切ることによって失われる場合がある。むしろ言葉ではなくリズムに注目して間身体的に合わせてい

くことによって、語り手の情動が生き生きと動き始め表出されていく。聞き手の身体もつられるほどの生き生きとした動きが起こる瞬間は非常に重要である。それをしっかりと身体の記憶に刻みたい。そうして次に身体レベルで間身体的に同期するコミュニケーションではなく、語りに主体身体を登場させて自分の視点や思いを介在させながら、奥ゆかしく豊かな表現を目指したいものだ。悲しみや怒りに対しても重要な間主観的にかかわり合いを生むような表現を、である。このようなかわり合いができれば、集団の中で「孤」になって自分を守るのではなく、主体身体の拡がりを回復した「個」として存在することができるのではないだろうか。

また筆者の体験では、抽象化能力が高く、記号に対する感受性が高い平板な羅列的語りの中で身体的違和感が繰り返し述べられることがある。これもかわり合いへの重要な手がかりである。身体への違和感は、身の二重化の働きによるものであり、高い抽象的思考レベルまで発達した一方で閉ざされたままの身体性を生き始める手がかりになるのではないかと思うのである。そこでも、聞き手の間身体的感応力による働きかけが重要であろう。新生児の知覚が示すように、記号ではなく人に敏感に感応することは身体に備わっている重要な生得的能力だからである。

いずれの語りも身体が情報化社会への適応として生みだした語りではないかと思う。しかも、身体が「現われない可能性」を持つからこそ、生まれてきた問題でもあると考える。深化途上の身体がさらに可能性を拓き、情報化社会の中で豊かに生きるための身体能力を養うとは、どのようにすればよいのだろうか。ただ聞き手と語り手が同期しつつ、間身体的にかかわり続けながら、言葉で働きかける営み続けることではないかと思う。やがてその営みが情動を大きく揺さぶり、“a - ha”体験の瞬間が生じる。間身体的交流の難しい語り手に接すると、感応する身体として同期し続けることは難しく、聞き手側も表情的身体や感応する身体を閉ざして、身体レベルのみや言語レベ

ルのみのコミュニケーションに陥りやすくなる。しかし、身体の同期に留まっていると大きな情動の動きが必ず生じるはずである。その“a - ha”体験によって、語り手と聞き手両者の主体身体の拡がりが回復する。身体はその時ほっとするのだ。

## 6. おわりに

筆者は、ゲームやネットに夢中になることで共感能力が失われる、と考えているのではない。むしろ子どもが情報への想像力を広げ、感応を身体で楽しんでいるのは、新しい感覚化を助け新しい適応能力を育てている面があると思う。その一方で、身体感覚を記号や機械の向こう側の見えない世界に対してのみ鋭敏にしていくことは、目の前の在る身体に対しての感応を閉ざしてしまう可能性を持ち、出来事描写や記号羅列の語りを生み出すことになっているのではないかと考えたのだ。そして、その語りはともに深化の過渡的形態ではないかと思う。私たちが記号化された情報を感覚化してより想像的に豊かに生きるために、新しい可能性が拓かれようとしている過渡的な形態ではないかと思うのである。その能力の開発を促されつつ、氾濫する記号化情報に身体が圧倒され、閉塞した集団に適応を迫られているために、感応する身体であることそのものが両義的な意味を生んでいる。私たちは過渡的形態のままどこに進むのか、身体性を生きることが本当に難しくなっている。

【謝辞】クライアントさんとの対話からいつも大きな刺激を受けていることを記して、心からの感謝を申し上げます。

### 【注】

<sup>1</sup> 市川浩 1984/1993:『<身>の構造』(講談社)を参照。ここには1970年代の講演も含まれている。

<sup>2</sup> 市川、前掲書 pp.69-75 を参照。

<sup>3</sup> 別役実 1987:『ベケットと「いじめ」』(岩波書店) pp.32-81 を参照。

<sup>4</sup> 市川、前掲書 p.211 を参照。

<sup>5</sup> 市川、前掲書 pp.9-75 を参照。

<sup>6</sup> スターン 1985/1989:小此木啓吾・丸田俊彦監訳、神庭靖子・神庭重信訳『乳児の対人世界・理論編』(岩

崎学術出版社)を参照。

<sup>7</sup> 市川、前掲書 pp183-210 を参照。

<sup>8</sup> メルロ＝ポンティ 1945／1967：竹内芳郎・小木貞孝訳『知覚の現象学』(みすず書房)を参照。

<sup>9</sup> スターンは、それまで精神分析等の臨床的視点から発達理論そのものを導き出してきたことを批判して、発達心理学と臨床事例と両方から得られている知見を両面から見ることを重視したのだが、2008 年横浜で開催された第 11 回世界乳幼児精神保健学会世界大会における講演では“evidence based”という考えに偏向している最近の傾向を批判している。あくまで彼は両方の視点を持つことを重視しているのである。

<sup>10</sup> “vitality affect”は、鯨岡峻(1999)が「生き生きした情動(力動感)」と訳しているように生き生きとした動きを表す言葉であるが、ここでは、小此木ら訳の「生気情動」という訳を使用する。

<sup>11</sup> 市川、前掲書 p32 を参照。

### 【文献】

- ・市川浩 1984／1993：『<身>の構造』 講談社.
- ・別役実 1987：『ベケットと「いじめ」』 岩波書店.
- ・スターン, D. 1985／1989：小此木啓吾・丸田俊彦監訳、神庭靖子・神庭重信訳『乳児の対人世界・理論編』 岩崎学術出版社.
- ・メルロ＝ポンティ, M. 1945／1967：竹内芳郎・小木貞孝訳『知覚の現象学』 みすず書房.
- ・鯨岡峻 1999：『関係発達論の構築』 ミネルヴァ書房.